

満点	60点	目標得点	48点	試験時間	60分	偏差値	70
大問数	2 (現代文1・古文1)	小問数	34				
	〔解答形式〕	選択式	28 / 34問	記述式	6 / 34問	論述式	0 / 34問
	〔問題難易度〕	C	1 / 34問	B	7 / 34問	A	26 / 34問
※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1… 出題形式は例年と変わらず。現代文一題・古文一題。計大問二題で時間は60分。記述とマークセンスの併用型である。記述とマークセンスの比率や設問数も例年通り。
- 2… 現代文に関しては、昨年は空欄補充が多かったが、今年は傍線部解釈や抜き出し問題が増えた。古文に関しては、例年通り、古文学習事項のほとんどの領域から出題されている。
- 3… 例年、本文の「正確な」読解力を試す設問が出題されるが、今年もそれは変わらない。しかし、現代文では論理展開が難化し、主張がつかみづらくなっている。

「こんな力が求められる!」

現代文で必要な能力は、大学や学部の違いによって、大きく変わるものではない。すなわち、「本文全体をすばやく整理し、筆者の主張を掴む能力」である。

しかし、今回の問題の場合は、少しその能力の「発展系」と言える能力まで問われている。早稲田大学を受験するような受験生が触れることになる「現代文」は、「文章全体」で筆者の主張が述べられることが多いが、今回の問題文の場合、第Ⅰ・Ⅱ段落は、言わば「枕（前置き）」にあたり、「本論」は第Ⅲ段落以降なのだ。しかも、その第Ⅰ・Ⅱ段落は非常に抽象度が高く、読解が困難である。よって、ここで大きく時間をロスしてしまうと、肝心な第Ⅲ段落以降がぼやけてしまう恐れがあるのだ。

先に述べた「発展系」の能力とは、そのような「前置き」と「本論」がきちんと峻別できる能力のことである。実際、早稲田大学もそのあたりを意識しているかのように、その「前置き」に関連する設問は漢字と、部分的な読みで解く空欄補充しか出題されていない。

このような能力は一朝一夕で身に付くようなものではなく、継続的な訓練によって身につけるものである。特別なことが必要わけではない。お茶ゼミのテキスト(Advanced以上)に載っている問題や、講師がお勧めする良質の問題演習を積み重ねることで充分に対応できる。「継続」、「積み重ね」、これだけである。

一転して、古文は本文の読解の段階でも、設問を解く段階でも、問われている能力は基本的なことのみである。古文の読解で必要な能力は文法、語彙のほかに「人物関係整理能力」であるが、今回は格別登場人物が多いわけではなく、会話主も容易に決まる。途中、人物の呼称が変わるので、混乱してしまうかもしれないが、古典ではこのようなことは当たり前であるし、早稲田大学に合格したいならば捌けなければならぬレベルである。

設問も、そのような人物整理を含めた、基本的なもので構成されている。具体的には語彙・文法・敬語法・文学史などである。例年、早稲田大学商学部は、古文の学習事項からまんべんなく出題されるが、今年もそうであった。

今回の古文は、努力の成果が反映される良問と呼んで良い。夏までに身につける能力を身にしみこませ、アウトプットの練習を繰り返す。それが合格に直結する。

大問別分析

【一】

予想配点	36／60点	時間配分の目安	35／60分
文章の種類／ジャンル	現代文／評論		
〔出典〕	守本順一郎『日本思想史の課題と方法』		
〔文字数〕	約四一〇〇字		
出題形式	選択式、記述式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問一 A	問二 A	問三 A	問四 C
問五 A	問六 A	問七 B	問八 B
問九 B	問十 B	問十一 B	
お茶ゼミカリキュラムとの関連 高3 Advanced レベル以上で対応可			

●本大問の特徴・概要

○ 本文の分量の約四一〇〇字は、やや増加である。設問数は昨年度と同様十一問である。
○ 難易度は、前述の通り、本文の読解に関して、難化したと言える。抽象的で難しく、時間がとられがちである。しかし、この部分は「前置き」なのである。第Ⅲ段落以降や、設問自体の難易度は標準的なだけに、受験生を惑わせるような現代文であった。昨年は、Standardレベルの現代文でも対応できたが今年も Advanced レベル以上ないときついだらう。そういった意味での「難化」である。

●注目すべき小問

問四 難しい。正解はハなのであるが、その正答に辿り着いたとしても、おそらくまたまなのではないだろうか。空欄補充の基本は前後を見ることであるから、前文に注目する。前文にも、空欄を含む文と同じように「同時に」というワードがあることから、ここの対応関係を考える。これが真つ当な考え方であり、それしかないと思われる。しかし、ここに注目できたとしても、正解がハである必然性は無いように思われる。そういった意味では、解けなくても仕方ない問題である。実際、合格者の復元答案でもここはできていない。

問八 宣長の古事記研究のマイナス点についてきちんと押さえられているかが問われている。傍線部の直前に「したがって」があるので、この部分が言い換えになっており、まさにその記述に合致するものがハの選択肢である。文章全体のテーマに関わる良問である。

問九 今度は宣長の古事記研究の「定義」を答える問題である。現代文ができるようになるためには、「定義」に敏感になる必要があるが、その視点を持つていけば、第Ⅶ段落の「彼における自己の対象化は消失し、上ツ代の無条件的承認と、漠意すなわち儒教的思考に対する批判とが両極にあらわれることになる」という部分には反応しなければならぬ。傍線cの文脈からして「上ツ代の無条件的承認」が妥当。これも訓練の成果が現れるであろう良問。

問十 問八同様、宣長のマイナス点について整理ができていたか。「上ツ代を無条件に承認する」ということは、「日本的世界を相対化できなくなる」ということである。よって正解はイ。

問十一 本文は宣長のマイナス点について述べられているものの、肯定的な部分もあるのである。テーマをまとめられている受験生は早稲田に受かる受験生なら気持ちよく解いたであろう。

※ なお、この問八と問十一で、二つ以上ミスしてしまうと、合格は難しい。手元の復元答案では、三つミスした者が不合格になっている。逆に、ノーマミス、一ミスであれば、現代文に関しては合格圏内である。実力を測る問題という点でもやはり良問である。

【第二問】

予想配点	24 / 60点	時間配分の目安	25 / 60分
文章の種類／ジャンル	古文／物語		
[出典]	『住吉物語』下		
[文字数]	約一一三〇字		
出題形式	選択式、記述式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問一 A	問二 A	問三 B	問四 A 問五 A 問六 A 問七 B 問八 A
お茶ゼミカリキュラムとの関連 高3 Standardレベルで対応可			

●本大問の特徴・概要

○ 本文の分量は一〇〇字ほど減少し、本文の難易度としても去年より読み取りやすく、易化したといえる。形式もほぼ変わらず、内容も空欄補充・敬語・文法・文学史・傍線解釈とバリエーションに富んでいることは変化がない。総括としては「例年よりやや易」となるだろう。

●注目すべき小問

問三 言うまでもないことであるかもしれないが、敬意の方向は三つのステップが必要である。

- ① 傍線部が尊敬語・謙譲語・丁寧語のどれであるのかを見抜く語彙力。
- ② 敬意の方向に関する基本知識の想起能力。
- ③ 人物関係を整理する能力。

である。古文読解の肝の一つになるものが「人物関係整理能力」であるが、そういった意味でこの問三のような敬意の方向問題は最も良く「古文読解力」を反映すると言ってよい。よって、少し細かく説明したいと思う。

2の「おぼす」は尊敬語であるので、動作の主体に対する敬意。ここは姫君の台詞であるが、それは姫君にとって、誰が「嘆くらんこと」が「悲しい」のであるうか。一行目の「中納言殿に申さばや」の台詞などから分かる通り、姫君が今ここで思いを馳せているのは、父親である。よって、「嘆く」主体は中納言と考えられ、正解はハ。

3の「申す」は謙譲語であるので、動作の客体に対する敬意。傍線部は中将の台詞であり、「おはしませ」と命令形が使われていることから、ここでは姫君に対して訴えかけている文脈と読み取れる。よって正解はイ。

6の「きこゆ・奉る」は謙譲語であるので、動作の客体に対する敬意。ここは姫君のセリフであるが、誰に「申し上げない」と誰が「おぼし嘆く」のであろうか。やはり父親しか考えられない。よって正解はハ。

8の「仰せらる」は尊敬語であるので、動作の主体に対する敬意。20～25行目を丁寧に読めば、この台詞は大将のものであると決められる。よって正解はロ。

9の「侍り」は丁寧語である。台詞文中であるので、受話者への敬意。8と同じく丁寧に読めばこの台詞は大将が大納言に話しているものである。よって正解はハ。

格別、難問というわけではないが、古文読解の訓練の成果が表れる問題として、取り上げた。面白ように、やはりここで大きく落とした者が不合格になっている。

問七 22行目の「ことさら申さん」は「袴着つかまつらん」ことを「特別に申す」わけなので、二の選択肢はひっかけである。トラップの仕掛け方が早稲田大学らしい。